令和７年度羽田中学校だより

天 空 の 橋

令和７年１２月９日

目指す生徒像･･･
Heart
Never Give Up
Do Our Best

大田区立羽田中学校

「させていただく」のはよい表現なのか
～謙譲の美徳 VS 主権者意識～

校長　小川幸男

いつの間にか２学期も終わりに近づいています。先週からは三者面談、３年生にとっては進路を決めていく大きなステップとなります。

併行して、校長・副校長による面接練習が始まっています。今年度はまだ数人しか面接練習をしていないのですが、羽田中に来てからの何年間かの面接練習で気になっている言葉遣いがあります。（それまでの学校では気にならなかったので、羽田中の生徒の特徴なのか、時代の流れなのかはわかりません。）それは、「～させていただいています」という言い方です。面接の中で「中学校時代、学級や学年・学校で何か役割をしていましたか」という質問をすることがあります。そのとき、多くの生徒から「〇〇（例、学級委員）をさせていただいていました」と返ってくるのです。私は、これにはとても違和感を感じるのですが、皆さんはどうでしょうか。この違和感は、私だけではなく多くの人が感じるようで、文化庁から平成１９年に発行された「敬語の指針」にも取り上げられています。「敬語の指針」によると、「させていただきます」が適切な語となるのは、次の条件にあてはまるときです。

ア）　相手側又は第三者の許可を受けて行い，

イ）　そのことで恩恵を受けるという事実や気持ちのある場合に使われる。

「敬語の指針」では、適切でない使い方の例もでています。

例）結婚式における祝辞の表現

×「私は，新郎と３年間同じクラスで勉強させていただいた者です。」

同じクラスで勉強するのは、新郎の許可が必要なわけではありません。許可が必要だとすると「新郎は高貴な身分で、本来なら身分が賤しい自分が同じクラスにいるなどありえないことであるのに、特別な温情で共に勉強させていただいた」という身分の上下がある社会ということになります。現代社会ではあってはいけない状態です。（結婚式の場で、あえてこのように表現し「新郎を立てる」「すごい人としておく」仮想表現を皆が共有している場ということは理解できますが……。）「敬語の指針」には次の例もでています。

例）　自己紹介の表現

×「私は，○○高校を卒業させていただきました。」

卒業するのは、自分の努力で単位を取得すればできるので、単位を取れている生徒にとっては卒業は特別な許可が必要なものでありません。あくまで、規定によっています。ですから、この表現は不適切です。ただし、〈成績が悪く単位がとれない状態で留年・退学となるときに、先生が特別な温情（特例で）で単位をあげた〉という場合には、「卒業させていただいた」は適切な言葉遣いになります。「させていただく」が表現している「許可を与えるもの」「許可を受けるもの」という身分の差は、敬語表現をしたから生じるものではなく、敬語でなくてもこの表現は身分差を表しています。

敬語表現……「させていただきます」

一般表現……「させてもらいます」

「させていただく」とは、〈自分でするのは許されず、下の者が上の者に許可を得る〉あるいは〈自分だけでは何ともならないときに、上の者の特別な許可で行うことができる〉という状態を表しているのです。では、「学級委員をさせていただいていました」は、何が違和感なのでしょうか。それは、「誰にさせてもらっているか」ということです。そして、「させてもらっているのが正しい状態なのか」ということです。「誰に」で、考えられるのは次の三つでしょう。

ア）　学校や先生

イ）　学級の級友（クラスメイト）

ウ）　神様（お天道様）

まず、「ウ）神様（お天道様）」はどうでしょう。信心深い人が、すべての行いが神の思し召しと考え、常に神に感謝をしているのだとしたら、その人にとっては適切な言葉遣いになります。でも、日本では一般的ではないでしょう。日本人ならば「お天道様」ならば感覚としてありうるかもしれません。「ア）学校や先生」はどうでしょうか。学級委員を先生が指名する、つまり学級委員を選ぶ権利が先生にあって生徒にない状態ならば適切な言葉遣いでしょう。部活動で顧問の先生が部長（主将・キャプテン）を指名する場合も同様です。しかし、中学校のほぼすべての学級では、学級委員は選挙で選ばれているはずです。中学校１年生の１学期には（誰に適性があるか、初見の生徒にはお互いにわからないので）先生が選ぶことがあっても、３年生で先生が選び指名することで学級委員（や他の委員）になることはまずないはずです。これは、民主主義である日本社会で、その社会の仕組みを学ぶという大事な学習だからです。つまり、「ア）学校や先生」の許可により「（学級委員等を）させていただいている」というのは、現実にあわないおかしな用語法なのです。

私自身、教員生活が３９年目になりますが「（学級委員等を）させてあげた」という意識をもったことは一度もありません。「生徒自身が自分たちの代表を自分たちで選ぶ」ということの方を重要視し、意識しているからです。

ですから「誰にさせてもらってるか」という先ほどの問いの答えは「イ）　学級の級

友（クラスメイト）」のはずです。「ア）学校や先生」というのは正解から一番遠い答えなのです。面接のときに「学級委員をさせていただいていました」と言う生徒に、「誰にさせてもらっているのですか」と突っ込んで聞いたときに、「クラスの友達です」と答えるならば問題ありません。でも、その意識はあるのでしょうか。ちょっと不安です。多くの生徒が「学校や先生です」と答えるような気がします。もしかしたら自分たちの代表を決めるときにですら、「先生が上で生徒が下」で「先生が決める権利がある。自分たち生徒にはない」という封建制の時代の感覚だったら怖いなぁと思います。国民主権が憲法の三大原則である日本の学校で、自分たちの代表を自分たちで決める権利が先生にあると思わせてはいけないのです。それでは、独裁･専制となってしまいます。

　さて、ここまで書いてきたような課題意識を生徒はもっているでしょうか。もっていたら、行わないようにするでしょうから、当然もっていないでしょう。生徒は「できるだけ丁寧な言葉を使う」「謙譲して自分を下げることで相手を立てる（敬語を使う）」という意識をしているだけなのでしょう。先生に「させてもらっている」などの意識はないでしょう。もし、「先生にさせてもらっている」と意識して、あえてその言葉を遣っているのだとしたら結構怖い状態です。それはあまり想像ができません。だとしたら、むしろ面接のときに〈丁寧な言葉〉を使おうとしているのですから立派なのだと思います。しかし、そのときにその言葉遣いに違和感を感じなくなっているというのも事実です。「（先生に）させていただいている」という言葉遣いに違和感を感じなくなっているということ自体が、中学生の権利意識の低下を表しており「危ないなぁ」と感じるのです。それどころか、「もしかしたら若い先生もあまり違和感を感じず権利意識が低下している」のではないかとも思い、危惧しています。（ちなみに、高校の教員である私の妻は、「させてもらっている」という受け身でなく、「していました」と自分からしていると積極性を表現した方が受験の面接として印象がいい、と言っていました。妻は毎年入試の面接官をしています。）

　「させていただく」が敬語になるのは、自分を低いという立場にして相手を尊重しているということを表現する「謙譲語」という日本語の仕組みによっています。これは日本の「相手を敬い」「和を尊ぶ」という文化が背景にあります。その文化自体はとても素晴らしいものだと思います。しかし、ときとして「謙譲」は、「自分の意見は言わず偉い人の言う通りにする」ということになりかねません。そうなると、現在の民主主義、国民主権の社会と反してしまいます。素晴らしい日本の文化を守りつつ、自分たちの権利を失わないような意識をしたいものです。

　さて、現在校則の見直しが進んでいます。１１月にあった生徒総会では〈「髪型」「靴の色」を自由にするという要望を学校にする〉という決議が通りました。その要望が正式に学校に出されています。とても、民主的な流れだと思います。しかし、生徒の内面はどうなのでしょうか。「自分たちで決めたこと」あるいは「要望したこと」については、その結果を自分たちで責任をとるという権利感覚はあるのでしょうか。もしかしたら「（先生）させていただいている」という感覚で「先生という偉

い人」に、ただ〝自由にして〟とお願いしているだけ、ということはないでしょうか。将来、日本という民主主義国家を自分たちで形成する主権者としての意識でなく、王様やお殿様にお願いしやってもらうという臣民（従属者）の意識の方が育っていることはないでしょうか。

先日の生徒総会でも各クラスからの意見は、「〇〇すべきだ。その理由は…」という意見の形ではなく、「〇〇してほしい」という生徒会の執行部への要望という形の発言が多い状態でした。羽田中では長い間、生徒自身で自分たちの社会を考える活動があまり行われていませんでした。生徒総会をきちんと行うようになったのも３年前からです。まだ、学校生活を自分たちでつくりあげるという文化が育ちきっていないのだと思います。

校則の改定をきっかけに「権利と責任について学ぶ」「主権者としての意識ができる」ことを期待しています。単に「自由になることを先生に期待する」のではなく、自分たちの社会の主権者として「自分たちで決められることに誇りをもつ」「自由になることで起きることの責任も担う」「自由になってもやるべきことをやるという意識をもつ」ようになることを期待しています。

〈道徳教材〉　　**謙譲してよかったか**

羽海中学校 1 年１組の 2 学期学級委員選挙。立候補の受付が始まると、クラスで一番成績が良く、誰からも信頼されている翼に、友人たちが声をかけた。「翼、次も学級委員やってよ。お前が適任だ！」翼は少し困ったように、にかっと笑って首を振った。「いやいや、僕なんてまだまだだよ。もっとふさわしい人がいると思うよ」翼の家では、幼い頃から「学級委員をさせていただいています」「部長を拝命しました」といった、常に一歩引いた謙虚な言葉遣いを教え込まれてきた。彼の辞書に「私がやります」という言葉はなかった。

結局、積極的に立候補した航が男子学級委員になった。航はすぐに学級をまとめ始めた。休み時間に意見を募り、先生にも臆することなく提案した。時には議論が白熱して言い過ぎることもあったが、彼のリーダーシップで１組は活気づいた。翼は副委員長として航を支えた。航が「翼はどう思う？」と意見を求めても、翼は「航の案で良いんじゃないかな。僕はサポートに回るよ」と答えるばかりだった。翼は謙虚さこそが美徳だと信じていたからだ。

月日は流れ、２年生になった。２年生になっても、ひきつづき航と翼は同じ１組でコンビとなり、変わらず活気ある活動が続けることができた。そして２学期、学校全体の生徒会の役員選挙の時期が来た。航は生徒会長に立候補した。演説で彼は、クラスの学級委員での経験をもとに、全校生徒のために何ができるかを力強く語った。具体的に行いたい魅力のある活動を公約としたのだ。一方、翼は今年も立候補をためらっていた。最初は断っていたが、最終的に周囲の推薦を受け、「副会長に立候補させていただきます」と壇上に上がった。そして、「みんなの意見をすくい上げまとめる」ことを公約として話した。しかし、具体的に何をするかは不明確な

ままだった。結果は、航は圧勝。生徒会長となった。しかし、翼は落選し、副会長にはなれなかった。生徒会選挙の後、航が生徒会長となって空いてしまった２年１組の学級委員には、みんなから押される形で翼が務めることになった。航が生徒会長になって、羽海中学校の生徒会は活性化した。公約にあげていた活動を実際に提案し、実施したのだ。実施には、先生から反対の意見が出る活動もあったが粘り強く先生たちとも意見を交換し、先生も生徒もお互いに納得のいく形に進めることができた。一方、学級委員が翼となった２年１組は活動が停滞しがちになってしまった。翼は、学級のみんなから意見をもらい、それを実行しようとした。でも、みんなからはそんなに多くの意見はでてこなかった。少数のでてきた意見を実行しようと思っても、自分だけでは中々できない。みんなにやってもらおうと思っても、ほどんどの生徒は積極的に動いてくれない。

　みんなから出た企画を実現するために先生と意見交換すると、先生からは「それは難しいね」と消極的な答えしか返ってこない。でも、翼は先生の意見に反対することができなかった。先生の意見に自分の意見を譲る形で、先生の意見が通ってしまうのだ。そのうちに、他の生徒から「みんながやりたいことを、やってくれない」と言われるようになり、翼の信頼は少しずつ下がってしまった。

　あるとき、生徒会で活動する航に、翼は尋ねた。「航はすごいな。どうしてそんなに自信を持って自分の意見が言えるんだ？」航は少し考え、真剣な顔で答えた。「自信なんて最初からあったわけじゃないさ。でも、1 年生のときから『僕がやる』って手を挙げて、失敗したり、みんなに助けてもらったりして、その経験が自信になったんだ。翼はいつも一歩引いてサポートしてくれたけど、自分の意見をもっと前に出してたら、もっと早く成長できたんじゃないか？」さらに続けた。「僕は本当にやりたいことがあったから、それに反対の先生と交渉するときも粘り強く意見を言うように頑張ったんだ。そうしないと自分を信頼して、自分に投票してくれた生徒のみんなに失礼だからね。」翼は、航に聞いてみた。「他の人の意見を大事にする必要はないの？ 自分の意見を強く主張するのはあまり気がのらないんだ」「そうだね。他の人の意見を大事にするのはとても必要なことだと僕も思うよ。でも、自分の意見を引っ込める必要はないと思うんだ。全員が自分の意見を出さず他の人の意見を待つ状態になったら、何も決まらないじゃん。もちろん、自分の意見を出すのは勇気がいることけど、それは乗りこえる必要があると思うんだ。もしかしたら、翼は〈みんなの意見を大事にする〉と言いながら、本当は自分の意見を出す勇気がでてこないんじゃない？」航の言葉に、翼はハッとした。「謙譲」は相手を敬い、和を尊ぶ素晴らしい心だ。でも、それに隠れて、自分の意見を主張することから逃げてきたのかもしれない。時には「私がやります！」と前に出る勇気や、自分の実力を信じて行動する積極性がなければ、成長の機会を逃してしまうこともある。そして、その「私がやります！」と前に出る勇気が、他の人のためになる活動につながるのだ。

　自分の成長のためには、航のように「自分が」と手を挙げる勇気が必要であることに、翼はようやく気づいたのだった。